平行電磁場中のカイラリティ生成の動的な増幅

田屋 英俊

慶應(自然セ)

<u>HT</u>, Phys. Rev. Research 2, 023257 (2020) [arXiv:2003.08948]

言いたいこと

- ✔ 平行電磁場 $E \cdot B \neq 0$ の下では、カイラリティ Q_5 が真空から生成
 - ・電場による粒子生成(Schwinger機構)と磁場によるスピン偏極(ランダウ量子化)との結果

- ✔ 素朴には、massive粒子のカイラリティ Q_5 生成はほとんどゼロ
 - E = const. ならば、Schwinger機構による粒子生成は $\exp(-\pi m^2/eE)$ で強く抑制

✔ E = const. に、早い摂動 (弱くて良い。例えば(ミニ)ジェット) を加えると、 massive粒子のカイラリティ Q_5 生成は大きく増大

導入



理論



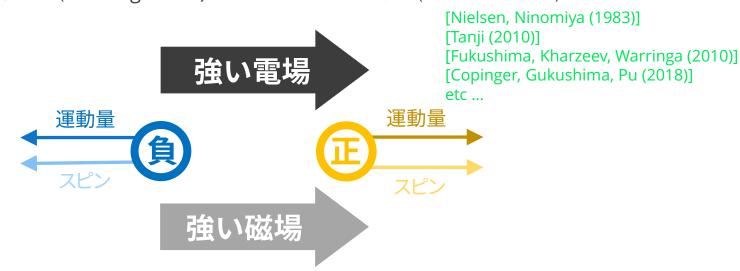
結果



まとめ

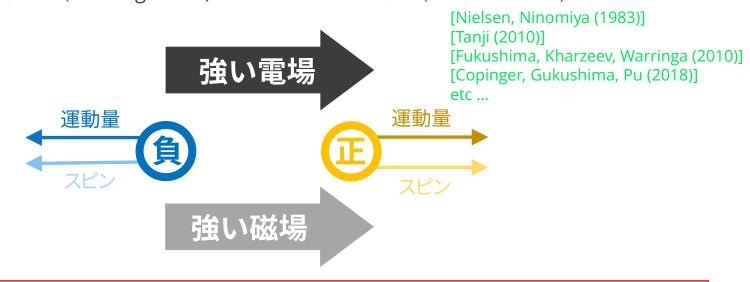
カイラリティ生成

- ✔ 平行電磁場 $E \cdot B \neq 0$ の下では、カイラリティが真空から生成
 - ・電場による粒子生成(Schwinger機構)と磁場によるスピン偏極(ランダウ量子化)との結果



カイラリティ生成

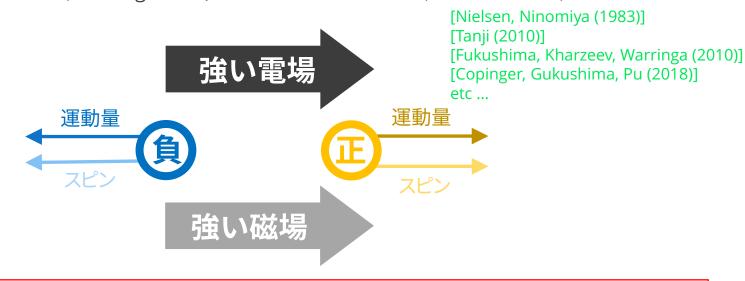
- ✔ 平行電磁場 $E \cdot B \neq 0$ の下では、カイラリティが真空から生成
 - ・電場による粒子生成(Schwinger機構)と磁場によるスピン偏極(ランダウ量子化)との結果



ヘリシティ = $+2 \times N_{\text{pair in LLL}} \sim$ カイラリティ = $+2 \times N_{\text{pair in LLL}}$

カイラリティ生成

- ✔ 平行電磁場 $E \cdot B \neq 0$ の下では、カイラリティが真空から生成
 - ・電場による粒子生成(Schwinger機構)と磁場によるスピン偏極(ランダウ量子化)との結果



ヘリシティ = $+2 \times N_{\text{pair in LLL}} \sim$ カイラリティ = $+2 \times N_{\text{pair in LLL}}$

✔ 現象論としての応用性

- ・重イオン衝突のQGP生成過程や異常輸送現象(e.g., CME)
- ・物性系(e.g., 大規模レーザー実験)で実現可能
- ・インフレーション期でのバリオジェネシス、初期磁場生成、カイラル重力波、、、

Schwinger機構

[Sauter (1932)] [Heisenberg, Euler (1936)] [Schwinger (1951)]

✔ 粒子生成数 N_{pair} は、<u>電場が定常電場なら指数関数的に抑制</u>



・ 電場がバンドを曲げる ⇒ level crossing ⇒ 非摂動的なトンネル効果

Schwinger機構

[Sauter (1932)] [Heisenberg, Euler (1936)] [Schwinger (1951)]

✔ 粒子生成数 N_{pair} は、<u>電場が定常電場なら指数関数的に抑制</u>



- ・ 電場がバンドを曲げる ⇒ level crossing ⇒ 非摂動的なトンネル効果
- ・場の理論でまじめに評価すると、# = π と決まる (Schwingerの公式)

[Schwinger (1951)]

Schwinger機構

[Sauter (1932)] [Heisenberg, Euler (1936)] [Schwinger (1951)]

✔ 粒子生成数 N_{pair} は、<u>電場が定常電場なら指数関数的に抑制</u>



- ・ 電場がバンドを曲げる ⇒ level crossing ⇒ 非摂動的なトンネル効果
- ・トンネル確率をWKB近似でざっくり評価すると、 $N_{
 m pair} \sim \exp[-({\ddot{\tau}} {\dot{\tau}} {\dot{$
- 場の理論でまじめに評価すると、# = π と決まる (Schwingerの公式)

[Schwinger (1951)]

massive粒子のカイラリティ生成は、定常電場なら指数関数的に抑制

dynamically assisted Schwinger機構

[HT, Fujimori, Misumi, Nitta, Sakai (may appear soon)]

- ✔ 粒子生成数 N_{pair} は、<u>電場が時間依存すると大きく変わる</u>
- ✔ 早い弱い摂動を加えると粒子生成数が増大 [Schutzhold, Gies, Dunne (2008)]



・早い摂動のincoherent散乱 (e.g., 光電効果) ⇒ ギャップ長さ/高さの減少 ⇒トンネル効果の促進

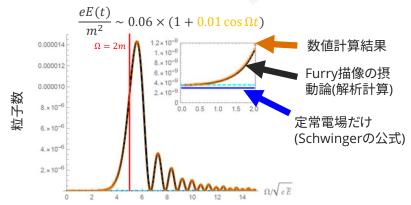
dynamically assisted Schwinger機構

[HT, Fujimori, Misumi, Nitta, Sakai (may appear soon)]

- ✓ 粒子生成数 N_{pair} は、<u>電場が時間依存すると大きく変わる</u>
- ✔ 早い弱い摂動を加えると粒子生成数が増大 [Schutzhold, Gies, Dunne (2008)]



- ・早い摂動のincoherent散乱 (e.g., 光電効果) ⇒ ギャップ長さ/高さの減少 ⇒トンネル効果の促進
- ・電場だけのときには、定量的によくわかっている
 - Furry描像による摂動論の大きな成功 [HT (2019)]
 - 高エネルギーの文脈では未観測だが、半導体物理 での類似物のFranz-Keldysh効果は観測済み



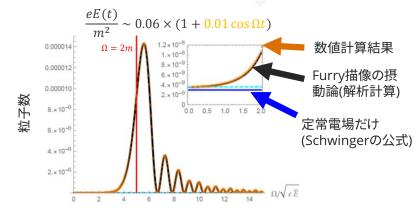
dynamically assisted Schwinger機構

[HT, Fujimori, Misumi, Nitta, Sakai (may appear soon)]

- ✔ 粒子生成数 N_{pair} は、<u>電場が時間依存すると大きく変わる</u>
- ✔ 早い弱い摂動を加えると粒子生成数が増大 [Schutzhold, Gies, Dunne (2008)]



- ・早い摂動のincoherent散乱 (e.g., 光電効果) ⇒ ギャップ長さ/高さの減少 ⇒トンネル効果の促進
- ・電場だけのときには、定量的によくわかっている
 - Furry描像による摂動論の大きな成功 [HT (2019)]
 - 高エネルギーの文脈では未観測だが、半導体物理 での類似物のFranz-Keldysh効果は観測済み



?

生成粒子数の増大を通じ、カイラリティ生成も増大させるのでは?

目的:この予想は正しいことを示す



導入



理論



結果



まとめ

Furry描像の摂動論による計算

[Furry (1951)] [Fradkin, Gitman (1981)] [HT (2019)]

SETUP: 定常な強い平行電磁場 \overline{E} , \overline{B} に摂動的な(弱く速い)電場 \mathcal{E} が乗った状況

$$E(t) = \overline{E} + \mathcal{E}(t)$$
 (ただし $|\overline{E}| \gg |\mathcal{E}(t)|$ かつ $\mathcal{E}(t = \pm \infty) \to 0$) $B(t) = \overline{B}$

STEP 1: Dirac方程式を強い定常電磁場 \overline{E} , \overline{B} に非摂動的に、速い電場 \mathcal{E} に摂動的に解く

$$[i\partial - e\overline{A} - m]\hat{\psi} = eA\hat{\psi}$$

$$\hat{\psi}(x) = \hat{\psi}^{(0)}(x) + \int_{-\infty}^{\infty} dy^4 S(x, y) e \mathcal{A}(y) \hat{\psi}^{(0)}(y) + O(|e\mathcal{A}|^2)$$

未摂動波動関数 $\hat{\psi}^{(0)}$ とプロパゲータSは、 \overline{E} , \overline{B} に非摂動的にドレスされてる

$$[i\partial \!\!\!/ - e\overline{A} \!\!\!/ - m]\hat{\psi}^{(0)} = 0$$

$$[i\partial - e\overline{A} - m]S(x, y) = \delta^4(x - y)$$

定常電磁場 \overline{E} , \overline{B} については解析的にその表示が求まる

STEP 2: カイラリティ演算子のin-in期待値を計算

$$Q_5 \equiv \lim_{t \to \infty} \int d\mathbf{x}^3 \left\langle \text{vac; in} \left| \hat{\bar{\psi}} \gamma^5 \hat{\psi} \right| \text{vac; in} \right\rangle = O(1) + O(|\mathbf{e}\mathcal{A}|^1) + O(|\mathbf{e}\mathcal{A}|^2) + \cdots$$





理論



結果



まとめ

✔ 解析的な公式

$$\frac{Q_5}{VT} = \frac{e\bar{E}e\bar{B}}{2\pi^2} e^{-\pi\frac{m^2}{e\bar{E}}} \times \left[1 + \frac{2\pi}{T} \left(\frac{m^2}{e\bar{E}}\right)^2 \int_0^\infty d\omega \left| \frac{\tilde{\mathcal{E}}(\omega)}{\bar{E}} \right|_1 \tilde{F}_1 \left(1 - \frac{i}{2} \frac{m^2}{e\bar{E}}; 2; \frac{i}{2} \frac{\omega^2}{e\bar{E}}\right) \right|_1^2$$

✔ 解析的な公式

$$\frac{Q_5}{VT} = \frac{e\bar{E}e\bar{B}}{2\pi^2} e^{-\pi \frac{m^2}{e\bar{E}}} \times \left[1\right] + \frac{2\pi}{T} \left(\frac{m^2}{e\bar{E}}\right)^2 \int_0^\infty d\omega \left|\frac{\tilde{\mathcal{E}}(\omega)}{\bar{E}}\right|_1 \tilde{F}_1 \left(1 - \frac{i}{2} \frac{m^2}{e\bar{E}}; 2; \frac{i}{2} \frac{\omega^2}{e\bar{E}}\right)\right|^2$$

強い定常電磁場からの寄与

✔ 解析的な公式

$$\frac{Q_5}{VT} = \frac{e\bar{E}e\bar{B}}{2\pi^2} e^{-\pi \frac{m^2}{e\bar{E}}} \times \left[1\right] + \frac{2\pi}{T} \left(\frac{m^2}{e\bar{E}}\right)^2 \int_0^\infty d\omega \left|\frac{\tilde{\mathcal{E}}(\omega)}{\bar{E}} \right|_1 \tilde{F}_1 \left(1 - \frac{i}{2} \frac{m^2}{e\bar{E}}; 2; \frac{i}{2} \frac{\omega^2}{e\bar{E}}\right)\right|^2$$

強い定常電磁場からの寄与

摂動電場からの寄与

✔ 解析的な公式

$$\frac{Q_5}{VT} = \frac{e\bar{E}e\bar{B}}{2\pi^2} e^{-\pi \frac{m^2}{e\bar{E}}} \times [1] + \frac{2\pi}{T} \left(\frac{m^2}{e\bar{E}}\right)^2 \int_0^\infty d\omega \left| \frac{\tilde{\mathcal{E}}(\omega)}{\bar{E}} \right|_1 \tilde{F}_1 \left(1 - \frac{i}{2} \frac{m^2}{e\bar{E}}; 2; \frac{i}{2} \frac{\omega^2}{e\bar{E}}\right) \right|^2$$

強い定常電磁場からの寄与

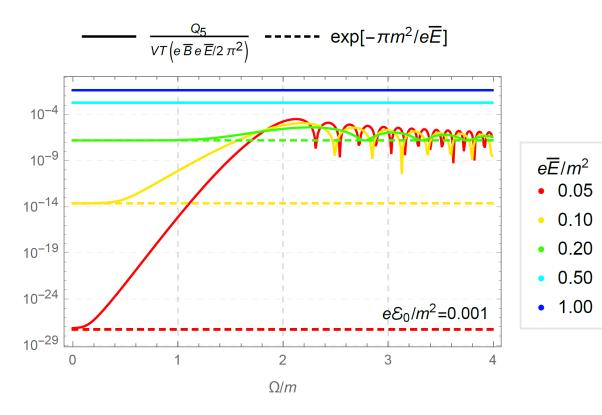
摂動電場からの寄与

- ・摂動電場 ε が弱い限り、任意の時間依存性について使える公式
- ・摂動電場をからの寄与>0
 - ⇒ 必ずカイラリティ生成を増大する
- • $m \to 0$ では摂動電場 \mathcal{E} は寄与せず、masslessのときのABJ anomalyに帰着
 - ⇒ 増大効果はmassiveな粒子にだけ効く
- $e\overline{B}$ はoverall factorとして出るだけで、増大の大きさを変えない
 - (: 磁場はエネルギーを与えないので、本質的に粒子生成率に影響しない)

✔ 定量的な話

$$\frac{eE(t)}{m^2} = \frac{e\bar{E}}{m^2} + 0.001 \cos \Omega t$$

$$\frac{eB(t)}{m^2} = \frac{e\bar{B}}{m^2}$$



- ・摂動電場 ε の周波数が $\underline{小さい}$: 増大効果は無視できる
 - ⇒ Schwingerの公式が予想する指数関数的抑制に帰着
- ・摂動電場 ε の周波数が大きい: 増大は大きくなる
 - ⇒ 増大の大きさは、おおよそ摂動電場の強さの二乗で決まる



まとめ

HT, Phys. Rev. Research 2, 023257 (2020) [arXiv:2003.08948]

- **✔** 平行電磁場*E* · *B* ≠ 0の下では、カイラリティが真空から生成
 - ・電場による粒子生成(Schwinger機構)と磁場によるスピン偏極(ランダウ量子化)との結果
- ✔ 素朴には、massive粒子によるカイラリティ生成はほぼゼロ
 - E = const. ならば、Schwinger機構による粒子生成は $\exp(-\pi m^2/eE)$ で強く抑制
- **✓** *E* = const. **に、早い摂動** (弱くて良い。 例えば(ミニ)ジェット) **を加えると、** massive粒子のカイラリティ生成は大きく増大
 - ・Furry描像の摂動論に基づく、任意に時間依存する摂動電場に対して、解析的な公式を導出
 - ・massless/周波数が小さい (massive/周波数が大きい) とき、増大効果は重要でない (とても重要)

✔ Outlook: 現象論の議論

- ・重イオン衝突の初期はグラズマ(強い)+ジェット(摂動)。CMEとかで、s, cなどの重クォークも効き得る?
- ・物性系。特に、大規模レーザーでのカイラリティ生成の可能性
- ・インフレーション期でのバリオジェネシス、初期磁場生成、カイラル重力波、、、